もっと知りたいふるさと ⑱

北澤祖舟先生と大角豆（ささげ）新田

市道川東線が姨捨停車場線まで整備された。旧更埴市と旧戸倉町を結ぶ千曲市の重要道路である。新田区を北から南へ一直線に抜けている。

昭和四十七年、道路端で危険のため伊勢社へ移転していた北澤祖舟先生之碑は、市川忠雄翁之碑とともに、平成十六年川東線が伊勢社まで開通の時、川東線新田入り口バス停隣の柳川原広場に移転した。

北澤祖舟の碑は明治四十一年（一九〇八）北澤塾の門下生により彰徳碑を建立したもので、新田の北の入り口にあって、小学生は登下校時この碑を中継点として遊び、憩の場所でもあった。

北澤祖舟先生彰徳碑

新田に開設の北澤塾は、孔子の教え「礼仁仏孝」を基とした学風、尊王主義が大きな訓化を及ぼした。近隣はもちろん、山を越えた東筑摩郡からも通うものが多かった。二五〇名とも言われる門下生からは、エノキ茸の人工栽培を開発した長谷川五作（旧姓田中）や、教師、政治方面で活躍する人物を出している。

この度、昔の場所近くに戻った祖舟の碑は、先人に守られて来たが、碑文も見ずらくなって来ているので、「杭瀬下・新田の歴史を学ぶ会」と新田区の皆さんの協力で、平成二十一年十月、北澤祖舟先生彰徳碑解説の碑を、彰徳碑の隣に記念碑として建立した。

私たち歴史を学ぶ会は、祖舟が明治六年杭瀬下小学校の前身「清漣学校」創設に全力を尽くし、杭瀬下新田二ヶ村で創設出来た歴史と、祖舟の清漣学校と命名した志を、彰徳碑の解説を通じて確認して解散したのである。

新田区には大角豆（ささげ）新田という異称があった。

千曲川の流れが大きく右折（大角）し、九百分の一という緩勾配の流れとなり、蛇行し土砂を置き、微高地・自然堤防を産んだ。

一六〇〇年代、新田開発が盛んとなり、肥沃な耕地は二毛作も可能で、畑が多くささげ豆が良く採れた。また、千曲川と尾米川に挟まれた新田地籍が大角豆に似ていることから大角豆新田と地名がつけられたと推察される。

西行法師が巡行の折、姨捨から眺めて「千曲川村を抱いて流れる」と表現したと聞いたことがある。大角豆新田と同じ母なる川千曲川を感じる。

千曲川は毎年のように洪水があり、洪水との闘いでもあった。尾米川は千曲川の伏流水できれいな川とされているが、千曲川の旧流路でもある。寛保二年（一七四二）戌の満水で、新田村の耕地が百パーセント流失したとき、尾米川は鋳物師屋、新田境から川幅五〇から六〇メートルにもなり、下流三ヶ村は後々まで原野沼地として残った。（鋳物師屋絵図）

尾米川は洪水の度、耕地を流し起返（おこしかえし）をして耕地を守った。「おこし」の「し」が「め」に変わって「尾米」になったという説もある。

東林坊川は上数ヶ村の排水路、悪水の処理場所であり、この地籍にある霞堤（かすみてい）は貴重な存在である。

元杭瀬下・新田歴史を学ぶ会　米澤秀衛

北澤祖舟先生彰徳碑解説

漢学者寺子屋師匠　虚白・酔醒翁（一八四七～一九一四）
幼時に泰峰寺八世無学大和尚に師事　九世住職　和漢の学問・漢詩に長じ温順・快活で還俗して近郷子弟に漢学を教えた
明治六年勝徳寺に創設の清漣学校の命名者で開設に尽力した
「清漣」とは北宋時代の大儒周敦頤「愛蓮説」に「清漣に濯われて妖ならず」とあり清らかなささ波に洗われて心まどわされないの意である
新田村に北澤塾を開いて後学の指導にあたり　門弟に地域の要人・教育者を輩出した
明治四十一年朋友や門下生により北澤塾頭　頌徳表彰式典を挙行
大勢の門弟の賛辞　先生の謙虚な慈愛に満ちた謝辞あり先生の偉徳の一端がうかがえる

北澤祖舟先生之碑

明治四十一年一月　朋友門生中

祖舟自賛の句
ワイクシャメン　矮躯赭面　コントンインウン　渾沌氤氳
リュウスイコウウン　流水行雲　コレジュコレブツ　維儒維佛
自賛　虚白舟

果亭書之（碑の書者　朋友児玉果亭　山の内町出身の日本画家）

背が低く顔は赤ら顔で　なんとなくもやもやとして
和やかな風ぼうの　気力盛んな男である
ただひたすら学問と仏の道を求め
流れる水やただよう雲のように自由に伸び伸びやってきた

平成二十一年十一月吉日建立

新田区
杭瀬下・新田の歴史を学ぶ会